第 26 回　東京地区高等学校 PTA 連合大会

教育と考福、そして生きぬく力

～私たちの明日と、子どもたちの未来～

報　告　書

平成 26 年 10 月 29 日 発行

東京都公立高等学校 PTA 連合会

目次

大会開催要項			3
式典	大会会長挨拶		4
	全国高等学校 PTA 連合会会長挨拶		5
	祝辞		6
基調講演	安中幹雄氏		8
PTA 事例発表	西部南地区　東京都立片倉高等学校 PTA		17
舞台発表報告	鷺宮高等学校	和太鼓部	20
	北園高等学校	ストリートパフォマンス部	20
	向丘高等学校	ヴォーカル・アンサンブル部	21
	竹早高等学校	コーラス部	21
	農業高等学校	服飾科	22
展示発表	東村山西高等学校	中国切絵部	23
	小平南高等学校	家庭科授業発表	23
	多摩工業高等学校	写真部	23
	小川高等学校	漫画研究部	24
	小川高等学校	書道部	24
	向丘高等学校	華道部	24
	飛鳥高等学校	美術部	25
	農業高等学校	服飾科	25
PTA 事例発表資料	片倉高等学校 PTA	パワーポイント資料	26
閉会のことば			27
資料			
	アンケート集計結果		28
	新聞掲載		30
	スポンサー		31
	実行委員会役割表		32

第 26 回　東京地区高等学校ＰＴＡ連合会大会　開催要項

大会開催趣旨

今の時代、子ども達を取り巻く環境の変化の激しさが彼らにとって、生きる指針や方向性を見いだしづらい今日を作り出していると思われる。

子どものころから持ち続けた夢、それすら何であったか、これから何をするべきなのか、どこへ向かっていくのかと、子ども達は漠然と不安を抱えながら、将来を見据え成長していく一番大切なこの時期を一生懸命生きている。

これからの日本の将来を担っていく子ども達の、健やかな成長と幸福を願い、この激動の時代を生きぬく力をつけていけるよう私たち保護者も努力していかなくてはならない。

第 26 回東京地区大会では、この「生きぬく力」をテーマとして掲げ、パラリンピック日本代表の安中幹雄様に講演を行い、また、昨年より保護者と子どもたちが一緒に参加することができる大会を目指し、子どもたちの舞台発表と展示発表を行う。

Ⅰ　大会概要

1.	主　　催	東京都公立高等学校ＰＴＡ連合会
2.	共　　催	一般社団法人全国高等学校ＰＴＡ連合会
3.	大会テーマ	「教育と考福、そして生きぬく力」 ～私たちの明日と、子どもたちの未来～
4.	開催日時	平成 26 年 7 月 12 日(土)　14:00～17:00　(受付 13：30～)
5.	会　　場	国立オリンピック記念青少年総合センター　カルチャー棟　大ホール
6.	参加対象	東京都公立高等学校ＰＴＡ連合会会員および高校生

Ⅱ　大会日程

1.	受　付	12：00	～	受付開始
2.	開会式	13：00	～	開　会
3.	講　演	13：20	～	講　師　　安中幹雄氏
4.	ＰＴＡ事例発表	14：20	～	都立片倉高等学校ＰＴＡ
5.	高校生舞台発表	14：40	～	都立高校　5 校　　ダンス、和太鼓他
6.	高校生展示	14：40	～	都立高校　7 校　　写真、絵画他
		16：00		閉会

式　典

〔司会紹介〕渡辺克己
都立農業高等学校平成 25 年度 PTA 会長

〔大会会長挨拶〕
第 26 回東京地区高等学校ＰＴＡ連合会大会会長
東京都公立高等学校ＰＴＡ連合会

会長　納見敏明

皆さん、本日は暑い中、ようこそいらっしゃいました。今回の東京地区大会を催すに当たり、急に台風が来まして、私たちは今週の初め、非常に心配しました。果たして東京地区大会を開催できるものだろうかと。そこで一昨日メールを流させていただきましたけれども、台風も足早に通り過ぎ、無事に今日、この日を迎えられて非常にうれしく思っております。これも皆さまの日ごろの心掛けのたまものだと思っております。

さて、この東京地区大会ですが、ここでいう「地区」というのは、全国高等学校 PTA 連合会としての東京地区でございます。

全国は、九つの地区に分かれております。北海道、東北、関東、そして東京が一都で一地区、それから北信越、東海、近畿、中国四国、それから九州というように、これらの大きな地区の中での大会ということになっております。ぜひとも皆さまのご協力を得て盛り上げていきたいと思っております。

今日のこの大会は、三部構成になっています。

まず初めに基調講演。今こちらにお越しいただいている安中さんに基調講演をお願いしています。

その後、福井の大会で発表することになっております、片倉高校 PTA による発表。そして、その後、各校の生徒による舞台上での発表。それから舞台だけではなく、展示の発表と、いろいろ盛りだくさんになっておりますので、ぜひとも最後までお楽しみください。

そして、これらのものを皆さんに持って帰っていただきたいと思います。まず安中さんからは、物事に立ち向かう勇気を。そして片倉高校 PTA からは、今後の PTA 活動に対してのやる気を。高校生からは若さいっぱいの元気を。この三つの気を、皆さんに持って帰っていただけたらと思います。

以上で東京地区大会、会長としてのごあいさつに代えさせていただきます。ご清聴、ありがとうございました。

〔全国高等学校ＰＴＡ連合会　会長挨拶〕

全国高等学校ＰＴＡ連合会会長　佐野元彦　様

皆さん、こんにちは。第 26 回東京地区高等学校 PTA 連合会大会が生徒諸君と一緒に開催されますことに対し、心よりお喜び申し上げますと共に、共催者として感謝申し上げる次第です。

私は先月 28 日の全国高Ｐ連の総会において、3 年間会長を務められた相川順子さんの後を継いで全国高Ｐ連の会長に選任をいただきました佐野元彦と申します。所属は秋田県連で、秋田県立秋田高等学校の PTA 会員であります。新米の会長でございますけれども、選任いただいた以上は全国 50 の都道府県市連合会、そしてそこに加盟する 236 万の高校生世帯の保護者の皆さま、そしてまた各高校の教職員の皆さまがたと力を合わせて、子どもたちが健やかに、そしてたくましく成長し、一人一人が自己実現を図れるような社会の実現に全力を尽くす所存でありますので、どうぞよろしくお願い致します。

ちょうど今「先月 28 日の全国高Ｐ連の総会で」というお話をしましたので、一つだけご報告を申し上げたいと思います。平成 23 年の 3 月 11 日、東日本大震災が起こりまして、全国高Ｐ連としても被災地支援を継続的に行ってまいりました。

震災から 3 年たった平成 25 年度も、全国の加盟会員の皆さま方から 400 万円を超えるご支援を頂戴をいたしまして、先月 28 日の総会の場において、福島県連の湯淺会長に 400 万円を贈呈させていただきました。

これはご承知の通り、被災三県の中でも福島県は原発の影響を受けている地域であります。沿岸部の原発エリアの高校生たちは、自分の生まれ育ったふるさとでは勉強はできなくて、福島県の内陸部に移ってサテライト校で大変厳しい学習環境、生活環境の中で勉強を続けております。彼らの支援に役立てていただこうということで、福島県連に寄贈させていただきました。

私ども、東日本大震災の記憶を風化させてはならないと思っておりますし、あそこで得た教訓をこの次につなげていかなければならないと思っております。

ただ、全国高Ｐ連の反省としましては、皆さま方からお預かりをして支援をさせていただいたものが、今どのように役立っているのか。そしてまた、今被災地の現状はどうなっているのか。その辺を会員の皆さま方にお知らせするところが、若干今まで足りていなかったなあと、反省をしております。これから被災地の現状、そしてまた皆さま方のご支援がどのように活用され、生かされているのか、を積極的に発信してまいろうと考えておりますので、ぜひ引き続き被災地支援の輪を広げていただくとともに、絶やさずにお願いをできればと思っている次第であります。

さて、全国高Ｐ連はこれまで、高校生の健全育成に関わる活動を中心に取り組んでまいりました。近年は子どもの命や安全を守る観点から、自転車、バイク、歩行者のマナー運動、薬物乱用防止運動に取り組み、最近ではスマートフォンのもたらすさまざまな課題にも本格的に取り組み始めました。しかしながら、家庭の経済格差の拡大、少子高齢化の進展、地域コミュニティーの崩壊、急速な高度情報化の進展、社会のグローバル化など、社会経済上のさまざまな課題が教育、文化、家庭生活に大きな影響を及ぼしています。

このような若者を取り巻く環境の変化や、深刻な状況に対して、私たち保護者は、そしてまた PTA

関係者は、これまで以上に真摯に向き合う必要があると思います。そのためには、私たち自身が現状を正しく認識し、理解し、問題を発見し、解決策を探り、仲間と共に行動する力を一層高める必要があります。教育力の三つの要素、家庭、学校、地域の結節点にいるのが私たちPTAです。

次の時代の主人公である若者たちがたくましく成長し、今よりも素晴らしい社会を築いてくれることを信じて、教育力の三要素の連関を作り出す風を今、起こさなければならないと思っております。

そして、風は誰かが起こすのを待つのではなく、私たち一人一人が起こすものです。
今ここにお集まりの皆さまがたお一人お一人が、風を起こす起点となって、東京全体にその風を吹き渡らせてほしいと念願をいたしまして、開会に当たっての共催者としての挨拶とさせていただきます。どうもありがとうございました。

〔来賓祝辞〕

東京都教育庁地域教育支援部
主任指導主事　鵜飼　敦之　様

皆さま、こんにちは。ただ今ご紹介をいただきました東京都教育庁の鵜飼でございます。

本日は第26回東京地区高等学校PTA連合大会が、大勢の保護者の皆さま方、そして高校生の皆さんにご参加いただきまして盛大に開催されますことを心よりお祝いを申し上げます。またPTAの皆さま方におかれましては、日頃から東京都の高等学校教育の発展、そして生徒たちの健全育成に対して熱心に取り組まれておられますことに、この場を借りて厚くお礼を申し上げます。

挨拶に先立ちまして、このたび都立高校で発生いたしました入学者選抜における採点の誤りについて、この場を借りてお話をさせていただきます。ご案内の通り、平成25年度、24年度の実施された都立高校の入学者選抜におきまして、多数の学校での採点の誤りがございました。その結果、本来合格となる受検生18名が追加合格というような形になりました。本来であれば合格していたはずの受検生、そして保護者の皆さま、都立高校の受検生、そして現在受検に向けて勉強している中学生、さらにはその保護者の皆さま、多くの方々に、大きな不安を抱かせました。このことにつきまして、深くおわびを申し上げたいと思います。

現在、東京都教育委員会と致しましては、全ての答案の点検を実施するとともに、外部の有識者を含めまして、都立高校入試改善委員会を立ち上げ、徹底した原因究明を行っております。そして来年度入試に向けて、実効性のある改善策を講じてまいりたいと考えております。採点の誤り、これは受検生の人生を大きく左右する、断じてあってはならないことであると考えております。今後二度とこのようなことが起こることがないよう、都民の皆さま、そしてPTAの皆さま方の、都立高校への信頼回復に向けて、教育委員会、そして都立学校と一体となって全力で取り組んでまいりたいと思います。PTAの皆さま方におかれましては、今後とも引き続き、ご指導をたまわりますよう、よろしくお願い申し上げます。

さて、近年の国内の産業構造、就業構造の変化に伴う雇用の多様化、あるいは流動化、これへの進展によりまして、不安定な就労を余儀なくされ

る若者が非常に多く、さらに先ほど会長からもご指摘がございましたように経済のグローバル化の進展等によって、企業間の競争であるとか、あるいは少子高齢化の到来は、核家族化の広がり、そして地域のつながりの希薄化と相まって、わが国の将来に対する不透明感、閉塞感というものを増幅させております。さらに若者の意識を見てみますと、社会の中に生きるという実感に非常に乏しく、規範意識が低下している、あるいは内向き志向である、そして自分本位の姿勢の広がりということが指摘をされております。

先月 6 月に内閣府が発表いたしました『子ども・若者白書』。こちらによりますと 15 歳から 34 歳の仕事、家事、通学をしていない、いわゆるニートと呼ばれる数が 60 万人。そして同じ年齢層でフリーターと呼ばれる非正規雇用の方が 182 万人ということだそうです。そして、こちらは推計になりますが、いわゆる引きこもりという形で家庭の中に引きこもっている方が約 70 万人というような、社会的、職業的自立に課題を抱えている若者の数が非常に多いということが報告されております。

こうした状況の中、これらの時代を担う現代の子共、若者の生きぬく力、これを育む。今回のこの大会のテーマにもなっております、この生きぬく力を育むこと。これは私ども教育委員会だけではなく、本日ご参集の保護者の方々にとっても、また社会全体にとっても、大きな課題ではないかと考えております。教育は、一人一人の生徒の個性、能力に着目するとともに、そうした若者たちが自ら考え、そして主体的に行動する力、将来を見通して自分で決める、こうした力を養うこと。さらに、それらを支援する体制を整備していくことが求められております。

これまでも私ども教育委員会では、高等学校における系統的なキャリア教育の実践、あるいは社会的、職業的自立に向けた教育プログラムの学校への導入を進めてまいりました。そして生徒の職業的自立意識の醸成に向けた取組を進めてまいったところでございます。しかし、学校教育のみならず、家庭での教育、学校と家庭との連携、そして家庭の横のつながり、さらには社会の様々な支援団体。こうした機関の活用などによって、社会のネットワークによって、社会総掛かりで、これらの問題に取り組んでいくということが重要であると考えております。

そこで、このネットワークの要となるのが学校、家庭、地域の懸け橋となる PTA の皆さま方であり、皆さま方に対する期待が非常に大きいものがあると考えております。未来を担う高校生たちの社会的、職業的自立に向けて、今後ともより一層のご支援、ご協力をたまわりますよう、お願いを申し上げます。

本日は昨年度に引き続いて、高校生の発表、展示があり、この会に先立ちまして、先ほどロビーで展示を見させていただきました。また、講演の後には、高校生諸君の発表があると伺っております。大変楽しみにしております。

最後となりますが、本大会を契機に、本日ご参会の PTA の活動がさらに充実、そして発展していくように希望致しますとともに、東京都公立高等学校 PTA 連合会のますますのご発展を祈念いたしまして、私の挨拶とさせていただきます。

〔来賓紹介〕

東京都教育庁地域教育支援部
主任指導主事　　鵜飼　敦之様
東京都立学校経営企画室長協会
会長　　澤田　悟　様

司会

以上で開会式を終了させていただきます。皆さま、ありがとうございました。

基調講演

〔講演テーマ〕「生きぬく力」
講師紹介
安中幹雄　氏
（あんなか　みきお）
１９７１年　　東京都武蔵野市生まれ
１９８９年　　都立保谷高校進学後、骨肉腫のため右脚を切断。
１９９８年　　アイススレッジホッケー体験会に参加。
「障害者スポーツはもちろん、パラリンピックは自分には全く無縁のものと思っていて、まさか自分が出るとは思ってはいませんでした。しかし、やりはじめたら面白く、気付いたらのめりこんでいて代表合宿に参加するようになり、パラリンピックを目指すようになっていました。（本人談）」
以降、パラリンピック日本代表として活躍
２００６年　トリノ・パラリンピック（イタリア）で５位入賞
２０１０年　バンクーバー・パラリンピック（カナダ）で「銀メダル」獲得!!!

司会　それでは、あらためましてこれより基調講演として、アイススレッジホッケー、パラリンピック日本代表の安中幹雄さんに「生きぬく力」と題してお話をいただきます。そちらにも実際に使われた物をご用意いただきました。
では、よろしくお願いします。

安中　ありがとうございます。皆さま、こんにちは。本日はこのような場にお招きいただきまして、朝倉さんや高田さんを初め、本当に関係者の皆さま、本当にありがとうございます。今、ご紹介にありましたように、私は 2010 年のカナダのバンクーバーで行われた冬季パラリンピックのアイススレッジホッケーという競技で銀メダルを取ることができました。
よく、オリンピック選手のインタビューで、「メダルを取れたのは応援してくれた方々のおかげだ」という声がありますが、われわれの場合もまさにその通りで、メダルが取れたのは監督やコーチ、スタッフ、家族や友人、会社の人たち、本当に応援してくれたたくさんの方々のおかげで取ることができました。残念ながら、まだ日本は弱

くてですね、98 年の長野の大会から参加してますが、長野、ソルトレイク、トリノと続けて 5 位で、メダルを取ったというのは今回のバンクーバーが初めてでした。私はこの競技を始めて、もう 10 年以上たち

ますが、その間、けがに泣かされたり、つらくてやめようようと思ったことも本当に何度もありましたが、今は、諦めないで続けてきて本当に良かったなと思ってます。
きょうは、私は、見ての通り右足がないんですけど、その右足を失ったときの話、そしてアイススレッジホッケーに出会ってメダルを取るまでのお話ができればなあと思いますので、よろしくお願いします。
まず最初に皆さん、アイススレッジホッケーって、まだどんなスポーツかってご存じない方が多いと思うので、2～3 分の紹介のビデオを、ちょっとご覧ください。
-･-･-･-･-パラリンピック映像開始　-･-･-･-･-
（ナレーション）　障害者スポーツ大会は世界の各地で数多く開催され、Sports for All の理念の下、多くの人がスポーツを楽しみ、日ごろの成果を競っています。障害があってもスポーツを極める心があれば、頂点を目指す舞台があります。それが障害のあるトップアスリートがしのぎを削る、世界最高峰の障害者スポーツ大会、パラリンピックなのです。
パラリンピック、冬季競技大会の競技種目は現在 5 競技あります。氷上ではアイススレッジホッケー、車いすカーリングの 2 競技、雪上ではクロスカントリースキー、バイアスロン、アルペンスキーの 3 競技が行われています。
-･-･-･-･-試合映像開始　-･-･-･-･-
（ナレーター）　激しいボディーコンタクトと華麗な組織プレー。迫力あるプレーが観客を沸かせるアイススレッジホッケーは、スレッジと呼ばれる専用ソリと、グリップエンドに駆動用の刃を付けた短いスティックを用いて座位で行うアイスホッケーです。選手の激しい動きを実現する最新型のスレッジやスティックには、数々のノウハウや最新の技術が凝縮されています。
ゲームは 15 分 3 ピリオドで行われます。1 チーム 15 人のうち 6 人の選手が氷上でプレー。選手は頻繁に交代し、ゲームのスピード感と迫力が継続。観客

を魅了します。現在、カナダ、ノルウェー、アメリカが3強といわれていますが、日本チームもトリノパラリンピックで5位、2008年世界選手権では4位と着実にレベルアップを果たし、バンクーバーパラリンピックではメダル獲得も期待されています。国内チームの精鋭が集まった日本チームの選手に、アイススレッジホッケーの見どころを紹介してもらいましょう。

(選手 A)　そうですね。当たる音だとかというところと、あと視覚のスピード感ですね。視覚とですね、聴覚で楽しめるところですね。

(選手 B)　障害を感じさせないハードな展開だとか、プレーが魅力のところだと思います。

(選手 C)　針の穴を通すようなパスを見てほしいですね。

(ナレーター)　アイススレッジホッケーは氷上の格闘技と呼ばれ、ウインタースポーツの花形競技として人気が高いスポーツです。

試合映像終了

安中　きょう、実際に持って来てあるんですけども、あまり時間がないので。もし時間があったらご説明させていただきます。

《アイススレッジ》

私のことを、まず簡単に自己紹介させていただくと、今、年は42歳で、そのバンクーバーの当時は38歳。家族は奥さんと子どもが2人います。小学校の男の子と幼稚園の女の子です。

仕事はですね、会社員で、普段は義足を付けて外回りの営業をしてます。残念ながらホッケーは、遠征や合宿とか道具とかでお金ばっかり使って稼いではくれないので、普通に仕事をサラリーマンとしてやってます。

生まれはですね、武蔵野市で、小学校のときは親の転勤で茨城行ったり、岡山行ったりしながら、スポーツは野球やったり、サッカー、少林寺等々やってました。中学は武蔵野市に戻って、部活はバレー部。ラグビーが好きだったので、週末は武蔵野のラグビースクールに行ってやってました。高校はですね、皆さんと同じように都立高校の、都立の保谷高校という所で念願のラグビー部に入って、毎日泥んこになって遅くまでボールを追っかけていました。

高校3年生になって、高校3年の夏休み、これから夏期講習行って、もう受験。大学受験をするぞ、というときだったんですけど、ラグビーは春の大会で後輩に代を譲って、たまたま夏休みに後輩を教えるために練習に参加しました。そのときに、何てことない当たりだったんですけど、ぶつかって。そうしましたら私の足がですね、パキーンと音がして、私はグラウンドにうずくまりました。みんなが寄って来てくれて「大丈夫か」って言われて、「大丈夫、大丈夫」って言って起き上がろうとしたらですね、ここの大腿骨って一番太い骨が割けるように骨折してまして、起き上がろうとしたらその骨がですね、皮膚からこう盛り上がって、完全に骨折してるような状態で、盛り上がりました。

そのときに私は、今まで40年生きてきて一番痛い痛みに襲われて、「いててて」ってうずくまって、救急車呼んで運ばれました。

救急車の人が病院を聞かれたときに「親が一番近いほうがお見舞いに来やすいなあ」と思いましたので、一番近い病院に行きました。

足の骨折はですね、腫瘍が原因での骨折でした。

ただ、その先生の判断で、腫瘍は良性だったので、「そのまま骨折の治療をして様子を見ましょう」ということになって、ギプスを巻いて入院しました。そこは整形外科の先生もいなくて、週に1回大きい病院から来るような所で、入院して1カ月たったんですけど、足は全く良くならずに、どんどん・・・。本来なら使ってないので細くなるんですけど、足はどんどん太くなって、最後の1カ月でそうなって。その次の1カ月、2カ月目には、もう丸太ん坊のように足が太くなって、とにかく熱くなって熱を持つようになって、1カ月ぐらい毎日40度の熱でうなされてました。昼間は親も家族も毎日来てくれてましたし、友達も夏休みで受験勉強が忙しい中、本当に毎日ひっきりなしに来てくれたので良かったんですけど、夜になると、もうずうっとうなされて1カ月過ごしました。

あるとき、今でも夢か現実か分からないんですけど、自分がもうそれで死ぬなあっていう、ギリギリのところまでいったことがありました。

そのときは18歳だったんですけど、18年間すごいいい人生だった、いい人生だった。一生懸命、自分にこう言い聞かせてたのを覚えています。

さすがにこれではまずいということで、親が御茶ノ水にある東大病院、大きい病院に転院することに、手続きを取って決めてくれました。私は、やっとこの苦しみから解放されて治るんだっていうので、希望を胸に東大病院に移ったんですけど、東大病院で検査の手術をすぐしましたところ、もう腫瘍が良性の腫瘍から悪性に変わっていまして、すぐにでも足

を切らないと命が助からないということで、先生がその日のうちに私の両親を呼んで、その旨を伝えました。うちの両親は泣きながら、「とにかく足だけは何とか残せないか」っていうので、うちの母とかも泣き崩れてお願いしたようですが、先生は「もう切るしか方法はありません」と言われました。

翌日になって私のほうも、「安中君、大事な話があります」と、両親立ち会いの下、同じように「安中君」と、先生のほうから「もう君の足は、すぐにでも切らないと助かりません」と。「命を取るか、足を取るか、選んでください」と言われました。私は大きい病院に行って、本当に治ると思ってたので、もう頭が真っ白になって、自然と涙が出て、しばらく何も言うことができず、しばらくの沈黙の後、ようやく先生に「切らない方法はないですか」と聞くことができましたが、先生の答えは一緒で「ありません」と。

もうしばらく、また沈黙が起きて、ようやく私も「分かりました」と、「よろしくお願いします」と言うことができました。

両親が帰って、その日の夜に看護婦さんが、つらいだろうから、睡眠薬を持ってきて、「きょうは、これで飲んで寝てください」と持ってきてくれたんですけど、私は、きょうは睡眠薬とかで逃げたくないと思い、断って、一晩中、泣いてました。よく涙が枯れるっていいますけど、本当に最後のほうは朝方になって出る涙もなくなって、そのまま涙が枯れて、泣き疲れてちょっと寝たんですかね。寝たか寝てないかっていうことで、朝を迎えました。

やはり、何が一番悲しかったかっていうと、これから大学とか入って、もちろん好きなラグビーもやりたかったですし、彼女とかつくってデートしたりとか、遊びに行ったりとか、そういったのとか、アルバイトしたりとか。

そういったのが全て、足を失うことによって駄目になるんじゃないかと思いました。将来的には仕事して、結婚して、子どもが生まれてっていうのを、本当にそういうのが駄目になるんだったら、もう生きててもしょうがないと、もう死にたいとも思ってました。

翌朝になって、私のちょうどベッドの隣、カーテンを挟んで隣の人が、おじさんだったんですけど、腕がないおじさんで、ずうっと私がしくしく泣いてたのを聞いていたようで、「安中君、きょうはね、お父さんお母さん来ると思うけど、もう涙を見せちゃ駄目だよ」と。「君もつらいだろうけど、君よりもね、お父さんお母さんのほうがよっぽどつらいんだから」と言われて、私はもう涙を見せたくなかったので、「分かりました」と言いましたが、自分より、何で足を切る自分より親のほうがつらいんだと、そのときは分かりませんでした。本当に今、親になるまでそれは分からなかったんですけど、親になって、そのときに言われたことが、そうなんだなと思ってます。

私もそんな、親孝行しろとか、皆さんに言える立場でもないですし、言うつもりもないんですけど、皆さんのことをお父さんお母さんが、皆さんが思ってる以上に思ってるんだっていうことだけは、分かってほしいなと思います。

うちの両親が来て、やはり目に涙を浮かべながら「きのうは一番つらいときに一緒にいてあげられなくて、ごめんね」と言って、私も本当に泣きそうになったんですけど、約束通り堪えて「大丈夫だよ」と言うことができました。手術は全身麻酔で約 10 時間ぐらいでしたでしょうか。目が覚めて、初めて、頭は麻酔から解けてぼーっとしてるんですけど、反射的に右手で、こうベッドの上から足をやっぱり触りました。ない足を。

ああ、やっぱり本当にないんだなと、がっかりしたのを覚えてます。

病院の中で一番嫌だったのが、トイレに行くときでした。松葉づえとか車いすとかでトイレ行くんですけど、終わった後に手を洗って、大きい鏡がありますよね。それで自分の姿を見るのが本当に嫌でした。醜いといいますか、自分じゃないみたいな。一本の足の化け物じゃないですけど、本当に受け入れられない自分がいて、嫌でした。小さい病院のときは毎日友達もお見舞いに来てくれてたんですけど、大きい病院に移って足を切ってからは、遠いのもあってお見舞いを断ってました。ましてや自分でも受け入れられないのに、人に足のない姿を友達とかに見せたくなかったですし、見せられませんでしたが、親がですね、いい加減に友達に（友達は「早く来たい、来たい」と言ってくれてたので）「来てもらったらどうだ」と言われまして、私もいつまでも断って

いるわけにはいかないと。友達にも会いたい気持ちもあったので、来てもらいました。

最初はお互い、何て話そうみたいなのを考えてたと思うんですけど、会って 10 秒、20 秒後には笑い声で、部屋中包まれました。本当にそれ以来、私も少しずつではありますけど、友達と一緒に、彼らと一緒に、早く退院して一緒に卒業したいなと思えるようになりました。

よく人にはですね、「どうやって足を失ってから立ち直ることができたんだ」っていうようなのを聞かれるんですけど、大きく三つあります。

一つ目がですね、やはりうちの家族ですね。家族の支えが一番大きかったと思います。特に母親はですね、その当時私は兄弟が兄と妹がいて、妹とかは中学生で寂しかったと思うんですけど、母は 1 日も欠かすことなく朝から晩まで、ずうっと見舞いに来てくれてました。何を言うでもなく、友達が来たらすうっと談話室か何かに行って、友達が帰るころにまた部屋に来て本を読んだりしてたんですけど、文句言うわけでもなく、私のわがままとか愚痴とか泣き言とかをずっと聞いてくれてました。本当に今思うと、いろいろわがまま言ったり、「何で俺が」みたいなので、ずうっと親を困らせてたなあと思いますが、本当に黙ってずうっと聞いてくれてました。

父も大好きなタバコもやめたり、母も両親と毎日お酒を飲んでたんですけど、私が入院している間はずうっとお酒を断ったりとか、仕事のほうも早く、休んだりして、お見舞いにずうっと来てくれてました。

二つ目がですね、友達の励ましでした。友達はですね、ノートを持って来てくれたり、受験勉強で忙しい中、千羽鶴を折ってくれたり、毎日のように手紙をくれたり、励ましの言葉をくれたりとか、本当に忙しい中、病院まで足を運んで励ましてくれたり、学校の様子を教えてくれたり、「早く一緒に授業出よう」とか、本当に励ましてくれたので、それがなかったら本当に学校に復帰して卒業したいと思えなかったと思います。

もう一つがですね、うちの伯母がお見舞いに来たときに、「幹ちゃん、良かったね」と。「足失ったけど、命が助かって良かったじゃない」と言われました。そのときは、何で自分だけこんな目に遭うんだとか、もっと早くから小さい病院ではなく、最初に大きい病院に行ってれば切らなくて済んだんじゃないかとか、マイナスなことばっかり考えてたんですけど、そうなんですね。その場で言われたのは、骨折したことによって病気が、腫瘍が発見されて、足だけで済んだんですと。

もしラグビーで骨折しなかったらですね、先生も言われたんですけど、腫瘍がどんどん、若かったので上にこう上がって来て、命が助からなかったと言われました。やはりそうなんだなと。足だけで済んで、命が助かって良かったんだなと、少しずつプラスに考えられるようになりました。

さっきお見せしようと思ったんですけど、これが実際にプレーしてる写真ですね。

これ、バンクーバーの写真です。これが決勝戦の会場でした。家族が応援に来てくれてます。勝ったときですね、これが。

アイススレッジホッケーとの出会いからメダルを取るまでということで、話をさせていただきます。アイススレッジホッケーと出会ったのは 98 年に、長野でオリンピックがありました。その後にパラリンピックがあって、その長野でアイススレッジホッケーが初めてあって、それを見ていた友人の「おまえもラグビーとかやってたんだから、やってみたらいいじゃないか」と、「すごいよ」って言う勧めで始めることになりました。

体験会というのがその後にあって、初めて参加したんですけど、参加したときは本当に驚きの連続で、それまで障害者の友達とかも一人もいませんでしたし、障害者スポーツとかやろうとも思ってませんでしたし、パラリンピックっていうのは自分とは別のものだと、自分とは関係のないものだと思っておりました。体験会に参加したときは、（きょうも夜 3 時から練習があるんですけど）夜中に行って、そんな夜中に足がない人とか車いすの人とかがたくさんスポーツやってたり、みんな筋肉がムキムキだったりして、「おまえ、腕、ほせえな」とか言われたのを覚えてます。

それまでの車いすの人の印象だと、私のイメージだと、か弱い感じのイメージをしてたんですけど、みんな全く違って元気があって、もう上半身だけはすごい体つきでびっくりしたのを覚えています。

気が付いたら私も練習に毎週参加するようになって、のめり込んでしまい、そのうち、長野での代表

の合宿に参加したりして、パラリンピックも目指すようになっておりました。

アイススレッジホッケー始めて良かったことって、本当にいろいろあるんですけど、大きく 4 つあって。

まず本当に仲間との出会いが一番、これが一番大きかったです。いろいろみんな障害を抱えているんですけど、共通して言えるのはみんな本当に元気があります。元気があって目標を持って頑張っているので、自分も負けられないようなメンバーばかりです。

例えば、障害の例でいうと、うちのチームには今、電車にひかれた人が 3 人いまして、1 人は通勤中に押されて線路に入って、切断したりとか。もう 1 人は弁護士を目指して勉強し過ぎて、寝不足で線路に吸い込まれてとか。あと、もう 1 人はお酒が好きで、酔っ払って線路に寝てしまって、気が付いたら手術台だったとか。みんな、そういうのも笑って話したりしてます。あとですね、皆さんにもあるのでちょっと気を付けてほしいんですけど、やっぱり一番多いのがバイクの人ですね。バイクで自分で突っ込んで、脊髄を損傷しちゃうんですよね。脊髄損傷すると、もうそこから下が、感覚がなくなって、車いすの生活になるんですけど、そういった方も多いですし、車の人もいます。また、スノーボードをやってて、スノーボードでジャンプしますよね。ジャンプして、し過ぎで背中から落ちて、脊髄損傷をして車いすになったりとか。あと、エスカレーターの点検の会社にいて、エスカレーターを点検してて、たまたまエスカレーターが抜けてて、そこに足が落ちてしまって、そのままエスカレーターが動いて両足を落としたりとか。あと、すごかったのがですね、ゴミの収拾車で働いて、ゴミを収集してるときに引っ掛かって、自分がこう入っちゃったんですね。入って両足、落としてしまったとか。あと、生まれつきの人もいますし、病気の人もいますし、いろいろいます、本当に。みんな、それぞれすごいなっていうので。

私と同じように足を病気で失った人もいるんですけど、その人とは義足屋さんの、どこの義足がいいとか、普段みんなとは、健常の方とは話せないような話ができたりとか。今、私、片足で自転車も乗ってるんですけど、その友達が「自転車も乗れるよ」とか教えてくれて、まさか片足で自転車を乗ろうなんて思わなかったんですけど、教えてもらったりとか。本当にそういったのを、仲間ができて、いろいろ自分も得るものがあって良かったなと思いました。

あと、2 つ目は夢中になれるもの。

それまでは何となく仕事をしながら飲み会ばっかりやって、張りみたいなのがなかったんですけど、ホッケーと出会って飲むに行く回数も減って、夜はトレーニングしながら、目標ができ、夢ができて、夢中になれて、人生も仕事も生きていても楽しくなりました。日の丸ってありますけど、なかなか日の丸を付けて試合に出たりとかいうことは、自分では考えてなかったんですけど、そういう機会が得られて、自分に対しての自信も付きましたし。

最後にテレビってありますけど、テレビもこう・・・。それまでは中学のときに『欽ちゃんの仮装大賞』に何度も行って出られなかったりとか、あと昔ニュース放送で『ズームイン!!朝!』っていうのがあったんですけれど、その後ろに行って手を振ったりとか、そんなことをやってたんですけど。これが、みのもんたさんの『朝ズバッ!』っていう番組だったんですけど、呼んでもらったり。とかいうこともありました。

あと、パラリンピックに向けてということで、やはりキーワード、2 つあって「モチベーションを継続する」っていうことです。私もずっと順調にバンクーバーまでメダルを取れたわけではなくて、つらいこともたくさんありました。やはり大きかったのが、2002 にソルトレイクっていう大会があって、そのときに代表が 15 人選ばれるんですけど、ようやくギリギリ 13、4、5 番目ぐらいの実力を付けて代表に選ばれると思い込んでいたら、ちょっと監督と合わず、代表から落とされました。そのときは本当に悔しくて、それだったらもうホッケーやめたっていうので、1 年間くらいやめてました。1 年後に大会が終わって、練習もずっとしてなかったんですけど、久しぶりにメンバーの結婚式に呼ばれて、みんなと再会しました。新しい監督になって、みんなも「気持ちは分かるけど、ソルトレイクは、もう一回やろうよ」と、みんなが声を掛けてくれて、やっぱり自分も好きだったのでやる気になって、2006 年のトリノを目指すことになりました。

トリノは、それまで独身で時間もあったので、悔

しかったので毎日仕事が終わって、ジムに夜行って、とにかくトレーニングしてトリノの大会に出ることができました。ただ残念ながら、さっきも申し上げました通り、結果は5位で、悔しい気持ちで終わりました。そのときに、もう34歳になって、そのちょっと前に結婚もしてたので、もう一回出られたから、パラリンピックというのを経験できたから、結果は5 位だったけど、もうやめようかなっていうのを思ってました。

ただですね、少し時間がたつとですね、やはりその気持ちが悔しい気持ちにまた変わってですね「メダルを取りたい、もう一回バンクーバーを目指してメダルを取りたい」という気持ちに変わって、家族に相談しました。子どもも小さかったので、また目指すとなると、月2回長野で週末合宿行って、それに加えて遠征が年に2〜3回あってとかで、また迷惑をかけてしまうんですけど、妻も「もう一回やりたいんだったら応援するから、家のことはいいからやんなよ」って言ってくれたので、もう一度今度はバンクーバーを目指してやることにしました。

その4年間というのは、やはり一番つらかったんですけど、何がつらかったかっていうと、合宿も行ってお金を使って時間を使って監督に怒鳴られて、疲れて帰って来て月曜日も仕事、眠くて、みたいなのもつらかったんですけど、それはそれでみんなと一緒にやれたので、まだ乗り越えられました。が、一番つらかったのが、平日仕事が終わって家に帰って、みんな子どもとかが寝た後にやるトレーニングですね。われわれもホッケーで食べてるわけじゃないので、どうしても夜になると弱い自分が出てきて、きょうは仕事遅かったからもうやめようかなとか、明日も早いからきょうはそのまま寝ようかなとか、そういう弱い自分との闘いでした、日々。

やはり、それを何とか気持ちを変えて続けられたのは「ソルトレイクでの代表漏れの悔しさ」だとか、「トリノでの負けた悔しさ」それから何よりもメダルを取ってお世話になった人とか家族とか、取って恩返しをしたいっていう、強い気持ちが持てたから続けることができました。

いろいろ書いてますけど、この習慣化っていうのが、続けるために「習慣化」っていうのが大事で、われわれも海外のチームとかだと、カナダと韓国とかロシアとかはですね、実業団化して、要は仕事しないでホッケーばっかりやってる国もあって、日本はまだまだもちろんそこまでいってないので、とにかく空いた時間で自分たちでやるしかなかったので、営業で車を運転してるときに握力を鍛えたりとか、朝もですね、30分、1時間早く起きてやったりしてました。

この習慣化っていうのが、要は皆さん、朝起きたら顔を洗ったり、歯を磨いたりすると思うんですけど、それのようにトレーニングも顔を洗うのと同じような形にすることが大切だと思います。最初は 2分、3 分とかでもいいと思うんですけど、それをずうっと毎日同じ時間ぐらいに続けて、少しずつ時間を延ばしてやっていくことが大切だなと思います。

トレーニングって、筋トレっていうのが特につらいばっかりで、楽しいことはあまりないんですけど、その中でも大事なのが最後の1回っていうので、例えば腕立て伏せとかで、10 回しかできなかったら、その 10 回目っていうのが一番最後はつらいと思うんですけど、その一番つらい最後の1回をいかに頑張ってできるかだと思います。きょうが例えば頑張って10回だったら、明日11回、その次1回でも0.5回でも、少しずつその最後の1回を自分に負けないでやることが大切だと思います。

うち、子どもがいるんですけど、今バランスボールに毎日乗らせて・・・Wii とかやりますよね。1日うちは30分なんですけど、「バランスボールを乗ってWiiをやれば、40分にしてあげる」って言ったら、その10分のために毎日乗って、Wiiやりながらバランスボールやってます。このぶら下がりっていうのも、私もやってますけど、子どもにも毎日やらせて、左の長男は今5分ぐらいぶら下がれるようになりました。下の子もですね、最初は 5 秒とか 10秒だったんですけど、今、年長ですけど、5 歳でようやくこの間2分ぐらいぶら下がれるようになりました。私がやっても2分とかすごいつらいんですけど、本当にすごいなと思います。

それで、バンクーバーでの戦い。バンクーバーでの戦いっていうのは、8 カ国。今、国でやってるのは15〜16カ国あって、その中で予選があって、選ばれた8カ国でメダルを競います。AグループとBグループで4カ国ずつに分かれて、最初総当たりしました。ワールドカップとかでも一緒ですよね。日本は最初Aグループでチェコに競り勝ち、韓国に勝ち、アメリカには負けて、グループでは2位でした。対するBグループは、もうカナダがダントツの強さで1 位でした。それでクロスオーバーっていうので、日本は1位のカナダと対戦して、勝ったほうが決勝。アメリカはノルウェーとやって、アメリカに勝ってっていうふうになります。

カナダチームっていうのが、実はバンクーバーで、もともと地元なので本当にカナダの応援ばっかりだったんですけど、オリンピックでも男女ともアメリカと決勝やって金を取ってます。「次はおまえらだ」

って言われて、前回のトリノでも金で、私も 10 年以上やってましたけど、カナダにだけは 1 回も勝ったことがありませんでした。

千分の一って書いてますけど、監督がですね、試合前に言った言葉でちょっと印象に残っている言葉があって、「カナダは強い」と。「でも、おまえらだってチャンスはあるんだ」と。「1000 回やったら 999 回はカナダに負けるかもしれないけど、1 回ぐらいは勝てるだろう」と。「じゃあ、その 1 回をきょうにしよう」と言いました。みんなそれで気持ちが高ぶって、「うおー」ってなったんですけど、よくよく考えるとそんな、「その 1 回をきょうに」っていうのは非常に無理だなっていうことがあったんですけど。実はそれを勝ったっていう試合が、あるので、見てください。

－・－・－・－・－・　試合映像　－・－・－・－・－・

安中　もう最後、大体ホッケーは 2 セットでやるんですけど、私は大体 1 分から 2 分ぐらいで疲れるので、ころころ代わって、最後の点数のときはベンチにいて、残り 1 分半あったんですけど、もうみんなで試合終わってないのに、みんなで泣いてたのを覚えてます。終わった後も、本当にみんなで抱き合いながら泣いてました。今まで結婚したりとか、子どもが生まれたときもそんな涙は出なかったんですけど、うれしくて泣けたっていうのは本当に良かったなと思いました。

監督から口を酸っぱく言われてたのがリスペクトっていう言葉です。リスペクトって、皆さん分かりますよね。尊重するとか、お互い尊重し合うっていうことなんですけど、それが一番大事なことで。ホッケーもとにかくサッカーとか一緒で、仲間のミスをカバーしてやっていくんですけど、お互いミスとかをけなし合わないで尊重しながらやる気持ち、ミスを責めない気持ちっていうのが大切で、本当にバンクーバーのときはそれがずっとできていたなと思います。

チームとグループの違い。これはちょっとあれか。チームっていうのは書いてある通り、皆さん、みんなで一緒になって、より達成していくっていうようなのがチームなんですけど、それを目指そうということでやってました。

鳥の目っていうのが、分かりますか。鳥っていうのは上から、こう見るんですけど、要はサッカーとかも一緒で、われわれも特にスレッジで下のほうなので目線がどうしても下で、周りが見えなくなってしまうんですけど、それを鳥から見た、要はテレビでサッカーとかを中継するような、同じようなイメージで、上からこう見るような目を養えっていうのを言われて、イメージしながらずっとやってました。中村俊介選手とかはそれができるっていうようなのは言われてます。

あと、無形の力っていうのが大事で、有形の力と無形の力っていうのがあって、有形の力っていうのは実際トレーニングしたりとか練習することなんですけど、それ以外の無形の力。やはりホッケーの勉強をしたりとか、ビデオを見たりとか、イメージトレーニングとか、そういうのは氷に乗っていない時間は常にやれっていうので、私も iPad とかにホッケーの動画を入れて、通勤中見たりとか、とにかく最後の 1 年とかはずうっとイメージしながら過ごしていました。

オンとオフ、メリハリっていうのがありますけど、要はそれが大事です。やるときはやる、休むときは休むっていうのが大事で。ちょっと話が戻りますけど、トリノの大会のときはですね、監督もパラリンピックが初めてで、とにかくずうっとオンだったんですよね。選手村とかに入ると、ビリヤード場とかインターネットする所とかあるんですけど、もう他のチームは、他の国のチームはやっているのに、日本チームは、やってるとですね、「俺たちはホッケーしに来たんだ」って、「そんなインターネットとかやりに来たんじゃない」と怒鳴られて。食事も、みんな輪になって食べさせられて、1 人ずつホッケーの話をさせられてました。他の話で、わーってなると、「ホッケーの話しろ」と怒鳴られて、みんなこう、何か萎縮して、何かつまらない大会になってました。ましてやビリヤードなんかもできるわけもなく、ずうっとホッケー、ホッケーでやって、そういう結果になりました。

バンクーバーのときは監督も、もちろん学んで、最初から買い物行ったりとか、ビリヤードとかも。私も許してもらって、ビリヤードを他のメンバーとやってたときに、監督が入って来たんですよね。他の一緒にやってたメンバーは、トリノのときのことを知らないので、私はやばいと思って、ちょっとやめようとしたんですけど、監督が来て「おう」って言って、「俺も一緒にやろう」とか言って、「入れろ」とか言って、やって。

ああ、本当に監督も変わったんだなあと。バンクーバーのときは本当にやるときは、スイッチを入れるときは入れる、休みどきは休むっていうのができた大会でした。杉山愛さんとかも言われてるんですけど、最初テニスの遠征とか行くと、まずおいしい物を食べて、観光して、それでスイッチを入れるっていうことを言ってました。

諦めない気持ち、チームが一つってありますけど、

これはまさにその通りで、本当に今までだと、さっきの点・・・あったんですけど、1 点取られるとずるずる 2 点目、3 点目っていうのが、もうみんなの気持ちの中にあって、いってたんですけど、本当にあのときはみんな気持ちを切らさずできました。チームは一つというのは非常に難しいんですけども、他のスポーツ選手の、サッカーのインタビューとかでも言いますけど、本当に一つになれた大会でした。

ちょっと最後、写真とかちょっと。これが、ちょっと写真を見ていただくと、開会式の写真で、これが選手村とかですよね。棟に分かれて、国が分かれてました。これが日本の、日本はイギリスと同じ所でした。こんな感じで、そんなにきれいじゃないんですけど、ここの壁の、左の壁の所がですね、本当はキッチンとかになってるんですけど。これがうわさのビリヤード場ですね。はい。

食事とかはトリノのときはみんなで一緒になって、「時間、日本は何時だ」って決めて食べてたんですけど、バンクーバーのときは 24 時間、好きな時間に集まって食べるんですけど、結局「何時に食事だ」とか言ってやらなくても、大体同じような時間に食べて、「ホッケーの話をしろ」なんて言われなくても、結局みんな最終的にはホッケーの話をするんですよね。

これはさっき、ゴミの収拾車でひかれた、足を切ってしまった彼なんですけど。こんなのもやったりしてます。これはやっぱり、その・・・銀メダルって、どうしても決勝の後にやるので、アメリカには決勝で 2 対 0 で負けてしまったんですけど、このときは悔しい気持ちとうれしい気持ちが半々のときですね。このころには、もううれしい気持ちのほうが勝ってました。

メダルはきょう、お見せが、なかなかできないんですけど、これなんですけど。監督にはないので、一人一人掛けて、15 人分掛けてあげました。一人一人、メダルの模様が違ってですね。こんな感じで、カナダの原住民の模様があって、これを、あなたはここの分、ここの所っていうので、みんなのメダルを合わせると、この絵になるっていうようなメダルです。これはちょうど金の人と変わってしまって。隣り合わせになったので。残念ながら、さっきこれ言いましたけど、監督に掛けたので、最初にもらったメダルとは、今あるのは違うメダルになってるので。そのときに私も、うまく模様を覚えてたので、ちょっと自分のメダルを探そうと思ったんですけど、そういう雰囲気ではなかったので、今に至っています。はい。

これは、うちの両親が来て、両親にメダルを掛けてあげたところなんですけど。私もずうっと親不孝ばっかり、親に心配ばっかり掛けて。皆さん、救急車に乗ったことはない方もいらっしゃると思うんですけど、私は今まで 7 回乗ってて。交通事故が 3 回ぐらいあってとかで、本当に迷惑ばっかり掛けてたんですけど、やっと親孝行できたかなというところです。

これがうちの子どもで、ちょうど七夕のときに、今まで息子の学校に行って、恐竜になりたいか怪獣になりたいとか書いてたのが、この年はちょっと汚いですけど、お父さんみたいになりたいですって書いてくれたのが、本当にうれしかったです。

以上で、私のお話を終わらせていただきます。

最後に、皆さんには三つですね、言いたかったのは、一つ目は・・・三つあるんですけど、家族とかを大切にしていただきたいなということ。あと友達ですよね。2 つ目はお友達、友達を大切にしてください。これは、私は友達のおかげで立ち直ることもできましたし、友達の勧めでホッケーとも出会うことができましたし、その仲間のおかげでこうやってみんなとメダルを取って、うれし泣きをすることもできました。これからもね、皆さんいろいろな人と出会っていくと思うんで、本当に一つ一つの出会いを大切にしていただけたらなと思います。

最後に、何か、何でも、スポーツでも何でも、勉強でも何でもいいんで、何か目標を持って、その目標に向かって継続して続けていって、目標を達成していただければなあと思います。本当にきょうは、ありがとうございました。

司会　ありがとうございました。

安中さんにとってスポーツって何ですか。

安中　もう、私にとってかけがえのない人生そのものだと思います。

司会　はい。ということは、安中さんにとって生きるって、ちょっと重い話かもしれませんが、足を失ってとか、いろんなことを経験されて、今思う生きるって。安中さんなりに考える何か、今なりの思うことがあれば。

安中　そうですね。さっき話にも出ましたけど、私も本当に足を切るって聞いたときは、言われたときは本当にもう死にたいとも思いました。けど、そのときできなかった、仕事をしてたりとか、結婚して子どもができたりとか、そういったのも本当に生きてるからこそ、かなえられることができたので、本当につらいことがあっても生き続けていればいいことはあるなと思います。

司会　はい。ありがとうございます。最後にですね、せっかくお持ちいただいたので、そちらのエクイップメントもそうだし、メダルも。

安中　本当はちょっと回してと思ってたんですけど。

司会　さすがにそれは、ちょっとね。

安中　いやいや。時間がある・・・。

司会　ええ。じゃあ、誰か代表で。そこの赤いＴシャツの誰か。ぜひ見たいという人。何高校の誰さんですか。

鷺宮高校生　いや、すごいっすね、これ。もう。

司会　どうですか。重いですか。

鷺宮高校生　めちゃめちゃ重いですよ、これ。

司会　っていうか、指紋が付きまくってますけど、大丈夫ですか。はい。ちょっと貴重な体験。

メダル見ることはさることながら、掛けることもね、ないですから。ちょっと貴重な体験を。将来のメダリストを目指して、頑張ってください。

鷺宮高校生　はい。

司会　ありがとうございます。最後、ちょっとだけ説明していただいてよろしいですか。

安中　このスティックだけ。このスティック、こちら側はですね、ホッケーの人が、アイスホッケーで使っている人が試合中とかで折るんですけど、その折ったやつを本当は捨てちゃうんですけど、われわれはもらって、それを切って使ってます。ここの刃っていうとがったところですね。これで、こう漕ぐときは上に持って漕いで、パックが来たら下に下ろして、こうしながらやったりしてます。このスティックは。このスレッジっていうのは、一人一人型を取って、私に合いやすいような型を取って、この刃を使って、2 本の刃を・・・。この 2 本の刃を使って、曲がるときはスキーと同じように片方の刃に乗せながら、うまくバランス取ってます。

司会　ちょうどフィギュアスケーターの靴の底にある刃が 2 本平行に並んでる感じですかね。ちょっとこれ、結構重いんでしょうか。ちょっと失礼します。あ、結構やっぱり重いですね。

安中　そうですね。

司会　そうか。これであんなにぶつかり合って。もう格闘技ですね。

安中　ここは、そうですね。肋骨折ったり、脳振とうとか、やっぱりありますね、結構。

司会　そうですか。そうか。じゃあ、ぜひですね、これを機会に。なかなかね、この間ワールドカップでサッカーは中継されてましたけど、そんなにね、見る機会がないと思うんですけど。どこかに行けば、試合、生で見れたりしますか。練習試合でも。

安中　練習は東大和のリンクとか、幕張の・・・きょうは 3 時から幕張でやるんですけど。大体夜中にやってるんで。

司会　え、3 時。午前 3 時から。

安中　午前 3 時からですね。

司会　え、仕事ちゃんとしてるんですか。

安中　仕事は、はい。大体金曜日の夜中とか、土曜日の夜中なので、仕事はして、終わってちょっと早めに寝て、行ってます。

司会　はい。3 時から何時ぐらいまで。

安中　3 時から 5 時とかですね。
大体 2 時間から 1 時間半ですね。

司会　だそうです。もし近場の方は行ったら。見学にぜひ。はい。じゃあ、すいません。いろいろと、ありがとうございました。

安中　ありがとうございました。

司会　安中さんに感謝の気持ちを込めて、花束の贈呈をさせていただきます。では、今回の大会実行委員長の高田教子さんより贈呈です。きょう、この作っていただいたアレンジメントはですね、園芸高校の園芸科の 3 年生です。安中さん、ありがとうございました。もう一度大きな拍手を。

〔ＰＴＡ活動事例発表〕「こころの花」

発表者紹介

松本成仁　氏

東京都立片倉高等学校ＰＴＡ会長

司会　この後はPTA活動事例発表ということになります。事例発表が終わりましたら、引き続き休憩を挟んで、生徒の皆さんの舞台の発表ということになりますので、お待ちください。はい。それではお待たせいたしました。

これより PTA 活動事例発表として、西部南地区の片倉高校 PTA 会長、松本成仁さんに「心の中の花」と題してお話をいただきます。では、松本さん、お願いします。

松本　皆さん、こんにちは。片倉高校の PTA の会長の松本といいます。今から片倉高校での活動の内容を「心の中の花」と題しまして発表させていただきたいと思います。《資料　1》

この発表は、8 月 22 日に開催される第 64 回全国高等学校 PTA 連合会大会　福井大会で発表させていただく内容になっております。

第 3 分科会「生徒指導と PTA」という所で発表させていただくことになっております。よろしくお願いします。

まず初めに片倉高校の紹介です。《資料　2》

片倉高校はご存じのように、八王子の自然の多い緑の中に囲まれた、恵まれた学校であります。それと普通科と造形美術コースがありまして、校訓は「開拓、創造、協力」ということで、明日に向かって生きる力を育むという方針の下、先生方が頑張って指導してくださっている学校です。

部活動では、吹奏楽部が毎年全国の吹奏楽コンクールに出場させていただいて、数々の賞をいただいております。また野球部等については、一昨年は西東京大会ベスト 4、陸上部、バドミントン部、卓球部と、関東大会等で活躍しております。

また都立高校では珍しいアメリカンフットボール部が活躍してる学校でもあります。

それでは本題に入らさせていただきます。私は PTA の会長、3 期目でして、娘が今高校 3 年生です。高校 1 年生で入学するときに私が PTA の会長を仰せつかることになりました。一番最初に学校の保健委員会というのがあるのですが、校長先生、副校長、保健の先生や、各学年の主任の先生が集まって、生徒の皆さんの健康状態や、健康診断の結果を情報共有する場です。そこで得られた情報で、思いの外、保健室に通ってる子どもが多いと。

例えば頭痛とか腹痛で保健室に行っても、よく話を聞いてみると精神的なもので悩みを抱えていたり、問題を抱えている子が多かったりします。

そういうことで結局、今、都立の高等学校は全校、スクールカウンセラーが配備されていますけども、スクールカウンセラーの利用も多いと。《資料　3》

多感な高校時代を、悩みを抱えながら、思いの外多くの子どもたちが（特に女生徒）が、勉学に励んでいるんだなあということが分かりました。

これに対して PTA で何かできることはないかなと思いながら、その保健委員会を後にして校門を

出て、最寄りの駅に、生徒たちが一番通う通学経路を、駅に向かって歩いて行きました。

そのときに目に飛び込んできたのが、黄色いタンポポの花でした。ちょうど6月ぐらいだったので、きれいな黄色が心の中に飛び込んで来ました。

「ひょっとしたら、ここに花を植えたら、落ち込んでるとか、悩みを抱えてる子どもたちの心に届いて、少しでも気持ちを和ませることができるんじゃないのか！」ということで、『通学路の運動場に面した一角を花壇として（全く荒地だったんですけども）何か花を植えることができないかなあ』と、思い付きました。

最初は「会長、何言ってんの」と。

「校庭の端っこなんか耕していいわけはないじゃない！」と言われましたが、校長先生や副校長先生、あるいは企画室長を口説き落としまして、「ちょっと花を植えさせてください」と、何とか承諾を得ることができました。

それで、ホームセンターで買ってきた1本980円のくわを持ってですね、ここにあるような芝生の所を耕し始めました。《資料　5》

実はここに映っている芝は、結構、ご存じの方もいらっしゃるかもしれませんけど、道路の横の土を雨が降ったときに流れないようにするために、ものすごく根が密になる芝でして、これがかなり厄介でした。

50センチ掘るのに、多分30分ぐらいかかりました。調べると「根が残ってると、そこからまた根が芽を吹いて、またこの状態に戻ってしまう」ということで、「きれいに取らないと！　残らず取り去らないと駄目なんだよ！」と、田舎のおふくろに電話したら言われまして、あ、そうかということで。

毎日土曜日ですね、野球部の声とかバッティングのカキーンという音とか、サッカー部のボールを蹴る音とか、アメフト部のヘルメットがガチガチぶつかる音なんかをＢＧＭに、頭にタオルをかぶった長靴履いた変なおっさんが、掘ってるところを想像してみてください。やっぱし八王子ということで、自然が豊富なんだなあということで、昆虫の幼虫なんかもかなりいっぱい出て来ました。一応、親切というか大切に埋め戻しましたけども。多分、生きてると思います。もう成虫になったと思います。《資料　6》

ということで、昨年の年明けには1.5メートルかける25メートルぐらいの、ちょっと花壇と呼ぶには怪しい状態と、縁石もなく怪しい状態なんですけども、一応先ほどの草が全部取られて、根が処理された状態の花壇らしきものが出来上がりました。《資料　7》

ここで、出来たので「何を植えるか」ということで、PTAの役員のみんなで検討して、中に園芸の得意な方がいらして、メンテナンスとかを考えると、1回植えて、また花が終わったらまた抜いてとかいう話はやっていると、全然労力的に間に合わないだろうということで、宿根、多年草といいますけども、毎年残って、根が残って、冬の間も残って、次が春になったら花を咲かせるという宿根の花を最初七つほど選びました。《資料　8》

この苗を買ってきて、肥料とかを用意して、園芸部の顧問の先生や園芸部の子たちとスケジュールを調整して、ある春の日に植え付けました。何か私の頭ぐらい寂しい状態の、花壇と呼べない

ようなものですけれども、これが、一番最初はこのぐらいで始めておかないと、毎年毎年株分かれして大変なことになるということで、最初はこのぐらいの寂しい状態でした。ここから始まりました。《資料　9》

PTA で定期的に夏休みの前であるとか、夏休み後の・・・ここに今、草を引いているところです。やはり雑草も生えてきますので、力を合わせて雑草処理等をしました。
《資料　10》

この写真は、昨年の晩秋、11 月ごろですね、チューリップの球根をいっぱい買い込んで、園芸部の顧問の先生や園芸部の生徒たちと PTA で植え付けました。球根の植え付けを終わった後で撮った集合写真です。《資料　11》

こんな感じで、PTA と先生と生徒のみんなで、一致協力して和気あいあいと花壇の整備ができたということです。これが今年の春の写真で、その植えたチューリップが入学式のころにはちょうど咲きました。

入学式に、新入生の皆さんや在校生のみんなの目にとどまって、少しでも何か心が和らいでくれたら良かったなあと。

多分、少しは見てくれたのではないかと思っています。実は私の娘が、ある晩、「何かラベンダーの紫がきれいだったよ」と言ってくれたときは、ちょっとほっとしました。

そういうことで、われわれがやったことは、要するに耕して花を植えたよってことだけなんですけども、学校に通う生徒が、一番多い駅までの道の所で、一番目に付く所で花壇を作ることができました。

落ち込んでいるとか、心に何か問題を抱えている子って、多分こうやって下を向いて歩くんだと思うんです。とすると、花壇が目に入って、少しでもいいから心が和んでくれたんじゃないかなあと思っています。

一番、もう一つ良かったのは、園芸部の先生や園芸部の子たちと、PTA の役員、委員で一致協力して花壇の、一つの花壇作りに向って活動ができたことが何よりの良かったことだと思っております。

皆さんの高校でも、多分やろうと思ってできないことはないと思いますので、何かやってみられてはどうでしょうか。短いですけども、以上で終わります。ありがとうございました。
《資料　12》

司会　松本会長、ありがとうございました。

心の中の花

東京都立片倉高等学校PTA　12

高校生発表　舞台部門

鷺宮高等学校　和太鼓部

鷺宮高校和太鼓部は、同好会から部に昇格して３年目になります。部員数も２１人と増え、発表する機会も増えてきました。太鼓の数が少なく、練習場所も狭く、多くの制約はありますが、部員は一生懸命に練習に取り組んでいます。演奏している曲は、秩父屋台囃子、水口囃子、三宅太鼓、ぶちあわせ太鼓などです。今回、都高Ｐ連の大会に出演させていただくこととなりとても有難く感じています。多くの皆様に感動していただけるよう、気合を入れて演奏いたします。

北園高等学校　ストリートパフォーマンス部

一人一人の個性あふれるダンス、先輩から代々受け継いできた伝統あるパフォーマンス、そしてチーム一丸となってつくったショーケースをぜひご覧ください。

高校生発表　舞台部門

向丘高等学校　ヴォーカル・アンサンブル部

歌うことが大好きな６名の生徒で、混声３部合唱を歌っています。声が織りなすのはハーモニーだけではなく、全員の心が紡ぎだす”音楽を愛する気持ち”です。

竹早高等学校　コーラス部

少人数だからこそできる、ごまかしのない、より綺麗な合唱を目指しています。自分たちで練習に工夫を加え、今日まで頑張ってきました。

高校生発表　舞台部門

農業高等学校　服飾科

本校服飾科は都立高校で唯一の服飾専門学科です。3 年間で洋裁、和裁、立体裁断、デザイン画、色彩、手芸など、服飾に関わる様々な授業を通して、知識と技術を身につけます。その集大成が 11 月の学校祭で行われるファッションショーです。ショーのテーマ、衣装デザインや製作、舞台構成やウォーキングまですべて生徒が企画・運営する伝統行事です。本日の舞台発表では、授業で製作した浴衣や昨年のファッションショーの一部をご覧いただきます。どうぞお楽しみください。

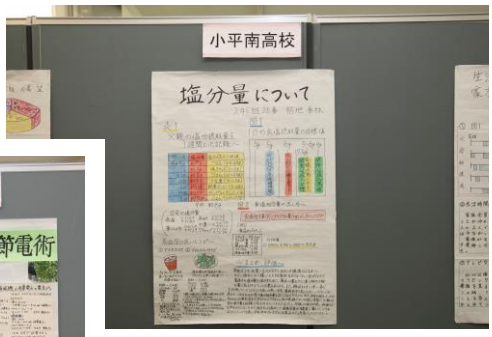
高校生発表　展示部門

東村山西高等学校　中国切絵部

『剪紙(せんし)』と呼ばれる中国切り絵だけでなく、ステンドグラス風のアレンジ、和風、洋風いろいろな切り絵を作っています。繊細な線の切り出しは集中力と持続力の成果です。

小平南高等学校　家庭科授業発表

毎年４月、新入生の希望者対象でお菓子作り講習会を開きました。
今年はゆず砂糖漬け入りカップケーキ！ほんのりゆずの香りがしておいしくできました。



多摩工業高等学校　写真部

部長も部員も写真が大好きでやる気が大です。

高校生発表　展示部門

小川高等学校　漫画研究文芸部

週に３回、個性豊かな仲間たちで仲良く楽しく活動しています。

近年、４コマ漫画コンクールへの参加や文化交流発表会のパンフレット表紙優勝など、活動の場を広げています。今回は、年に３・４回発行している部誌や部員それぞれの想いが詰まった作品を展示しました。

小川高等学校　書道部

小川高校書道部は、５人という少ない人数ですが、文化祭や大会に向けて日々活動しています。楷書や行書をはじめ、いろいろな書体が書けるようチャレンジしています。

向丘高等学校　華道部

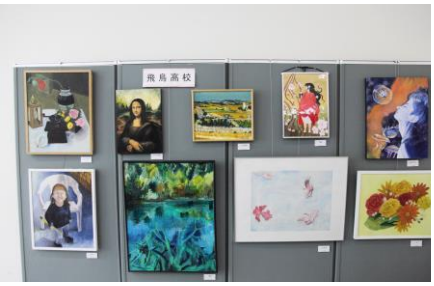
「花の甲子園大会」関連地区出場、池坊東京華展、校内での美化活動等、楽しみながら活動しています。

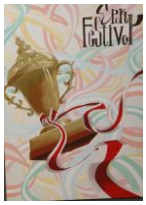
高校生発表　展示部門

飛鳥高等学校　美術部

月曜から金曜の放課後 17 時半まで（木曜日のみ 18 時半まで）、そして月一回土日午前か午後、楽しく活動しています。部員は、今年は女子のみ 22 名。

文化祭はもちろんですが、コンクールなど、自分が出展したいものを目指して「無」の心とともに活動中です。世界中の誰も作り出せない、自分だけのものを自分らしく描き出せる美術が大好き！！です。





農業高等学校　服飾科

本校服飾科ではより専門性の高い授業を行うため、外部講師の先生を招いた特別授業を実施しています。内容はピンワーク、パーソナルカラー、立体裁断、ヘアアレンジ、ウォーキング、リボン刺繍など様々です。

2 年生では、ファッションデザイン画を学習します。顔や手の描き方、プロポーションやポーズ、画材の使い分けなどを学習し、デザイン画コンテストにも挑戦しています。

本日の展示物は、学校祭でおこなわれるファッションショーの衣装デザイン画です。グループごとのテーマに沿って、各自がデザインを考えました。

片倉高等学校 PTA　パワーポイント資料

資料１

資料２

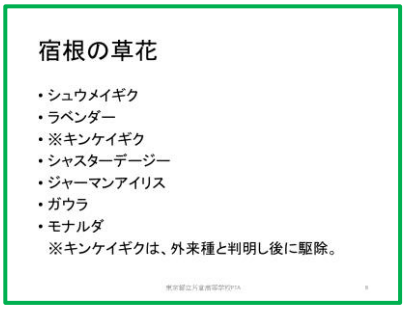
資料３

資料４

資料５

資料６

資料７



資料８

資料９

資料１０

資料１１

資料１２

閉会のことば

〔大会実行委員長　閉会のことば〕

第 26 回東京地区高等学校ＰＴＡ連合会大会
**　実行委員長　高田教子**

　本年度の基調講演は東京地区大会のテーマに相応しいメダリストの安中氏にして頂きました。講演の途中、生きぬく事の大変さ辛さそしてその力強さに感動し涙された方も多く見られました。安中氏には本当に感謝致します。ありがとうございました。そして、高校生による舞台発表と展示発表では高校生らしい力を感じさせて頂きました。

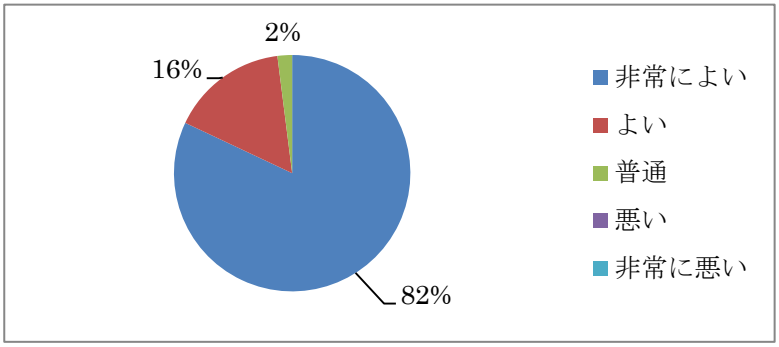
　最後になりましたが、大会開催に際しご協力頂きました、関係各所、スポンサーの皆さまには本当に感謝申し上げます。

　これをもちまして、閉会とさせて頂きます。

≪会場内≫

アンケート集計結果

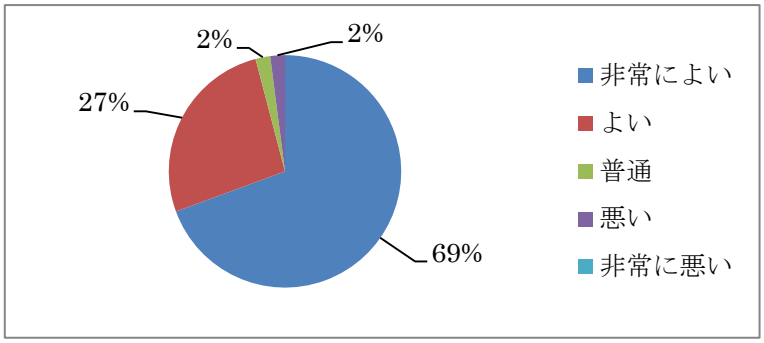
1．高校生の発表について



◎日頃の成果がよく表れていた。パワーをもらった。
◎勉強のかたわら日々本当に努力し練習しているのだと思いました。レベルの高いパフォーマンス楽しめました。
◎若さあふれる舞台、透明感のある歌声に心が洗われるようでした。若い高校生の力に元気をもらいました。
◎和太鼓、ファッションショーなかなか見ることができない発表が楽しかった。
◎他校の文化部の活動を見る機会がすごく参考になる。
◎どの学校の生徒も普段の活動の頑張りが伝わってきた。
◎どれも個性にあふれていて、日ごろの活動の成果を見られた。歌声に鳥肌が立った。心が動かされた。
◎どの発表も誠実に取り組む姿がさわやかです。高校生らしい。農業高校に服飾科があるとは知らなかった。
◎一生懸命な姿が青春ですね。輝いて見えました。発表までの努力がよくわかります。
◎保護者の姿を高校生が身近に感じる機会となる。
◎今子どもたちが夢中になっているものや自らの力を出せる場は、今後も大切にしてほしい。
◎それぞれの学校共にテスト期間もありながらの準備、練習をたくさんした結果がとても伝わってきた。若いっていいですね。
◎和太鼓素敵でした。力強い姿で心打たれました。もっと長く聴きたかった。
◎生徒の皆さんのひたむきさが伝わってきました。日頃の練習の成果をのびのび発揮され素晴らしかった。取り組む姿勢がよかった。
◎完成度が高く素晴らしかった。
◎現在の都立高生の品の良さと力を感じる。
◎鷺宮高校の和太鼓部の演奏は、高校生とは思えないほどのレベルの高さで驚きました。大太鼓、しめ太鼓、笛、鐘、掛け声まですべて素晴らしい。大変な練習量であったのでしょう。
◎いろんな発表があって楽しめた。高校生の頑張る姿がたのもしかった。
◎和太鼓大変迫力がありました。ダンスも楽しそう。ファッションショーは、ドレスがきれいでデザインも良かった。夢を実現してほしい。
◎高校生が夢中に何かに打ち込んでいる姿を見て元気になりました。
◎生徒の真剣な演技に感動しまし。和太鼓部、パフォーマンス部よかったです。
◎生徒たちが一生懸命発表している姿を見て涙が出るほど感動した。いろいろな高校の発表が見てみたい。
◎舞台のお花、高校生が活けたとは思えないぐらいとても素晴らしいです。
◎郊外のステージで発表できるレベルに向かって日々練習する良い機会だと思います。各校行の代表が紹介説明すればよいと思いました。学校の代表として発表している意識が高まると思います。
竹早コーラス、よかった。
◎安中さんのおっしゃっていたチームをどの高校にも感じました。
◎和太鼓の迫力、ダンスの体力、チームワーク等良い努力の成果が出ていてとても楽しめました。
ヴォーカルアンサンブルも 6 人の声なのにひとクラスで歌っているように聴こえました。コーラスもきれいでした。練習も楽しく厳しく思い出に残るものになることと思います。ファッションショーもとても楽しく素敵でした。将来のファッションリーダーが出るといいですね。
◎若い力がみなぎっていて、エネルギーを頂きました。今後、社会に出ていく力になっていくのではないかと感じました。

◎プロの舞台のようにはいかないが、そこも含めて高校生らしさ、一生懸命さが伝わってきた。
◎高校生の可能性と力強さを感じました。また来年もできれば。

２．基調講演について



◎とても感激しました。
◎高校生の多感な頃に足を失い、困難な状況を家族や友人に支えられ目標を持ち、継続していく努力に感動しました。
◎世界で戦った方の話は、すごみがあり力を頂けた。
◎障害を持っても目標をもって人生を楽しむお話。ぜひ高校生に聴かせたい。
◎貴重な話が聞けて良かった。楽しかった。
◎語り口、お話の内容に安中さんの実直なお人柄を感じました。高校生へのエールが散りばめられていて良かったと思います。
◎大変良い講演会でした。高校生たちだけでなく親の私たちにも良いお話でした。ありがとうございました
◎テーマを決めてお話して頂けたら良かったと思います。友達、親を大切にする。目標を持つことの大切さを教えていただきました。
◎生きる幸せ辛さを感じました。協力や頑張り、親や友達などの愛情や思いを感じました。
◎子どもや周りの人を支えられる人になりたいと思った。
◎苦しみ、悲しみは本人しか伝えられないと感じた。スライドと説明がリンクしているともっと良かった。
◎苦難に克つ　生きぬく力、テーマに合致したお話感動しました。
◎安中さんの「生きていれば…何でもできる」という言葉が印象的でした。
◎馴染みのないスポーツ競技でしたが、パラリンピックの映像を見せて頂いてとても良かったと思います。
◎飾らない気持ちを話して下さり、どんなことが起きても生きてゆくこと、生きてゆけることが伝わる、心に訴える講演でした。高校生全員に聞かせたいと思いました。
◎人生というものを考える時間でした。
◎親として同感できることが多々あり、また　安中さんの言葉の中に子どもに話してあげたい内容が多く出てきたため、帰宅後受験を控えた娘に、モチベーション、継続、友達の大切さ、あきらめない気持ちなどを話そうと思います。
◎優等生でないところがよかった。身近に感じて頑張る気になった。
◎安中さんの想いがとても心に響きました。ご自身の生い立ちから、現在に至るまでの経過や、今後のことなど、今の若い人たちへのメッセージもよかった。泣けてしまいました。
◎素晴らしい方を招いて下さったのですが…話がとびすぎてちょっと残念でした。話の順番やスライドを合わせてほしかったです。勿体無い。人選は良かったです。
◎とても分かりやすくお話ししてくださった。安中さんの性格に親しみがわいた。
◎時間が足りないと思うくらい素晴らしい講演でした。乗り越えてこられたものの大きさに涙が出ましたが、そのおかげで得た今の幸せや家族と仲間に対する思いが伝わってきた。まさに生きぬくことの大切さを感じました。もっと多くの子どもたちに聞かせたいですね。
◎家族の絆、支え仲間の励まし。目標を持ってあきらめずに前を見て進んでいくこと。とても考えさせられるとても素敵な講演でした。
◎家族について考えさせられた。親として子どもの支えになりたいと思いました。

アンケート集計結果

◎健常者から障碍者になって、パラリンピックで活躍されるまでの苦悩や努力は高校生や保護者にもよく伝わったと思います。
◎今回のテーマにあっている。安中さんの素直なきれいな心がとても強く感じました。
◎日常の中の非日常、家族に突然起きた不幸。不幸をたくさんの大きな幸せにつなげた思い。あきらめない心、希望、目標。日々の生活で忘れていたもの、あたりまえだけどできない事思い出しました。
◎笑いあり、涙あり　とても感動しました。心にしみました。
◎力強く生きていくとても難しいテーマですが、たくさんの人の力に支えられてみんなが幸せになれるように一人ひとりが考えて行動できるようにしたいとおみました。
◎生命の大切さ、何かに打ち込むことの大切さがよくわかりました。

３．東京地区大会全般について

◎高校生の頑張りは別として、これは PTA が主催する大会とは呼べないのでは？
◎昨年より会場の場所がよい。交通の便がよく助かる。
◎会場の場所は良いと思うが、駅から遠いのが難点。開催時期が秋だとよいかも。
◎参加人数がもっと多いとよかったと思います。
◎生徒発表を見ていたので展示を見る時間がなかった。開催時間の検討を
◎いろいろな面からベストだと思います。
◎司会進行がよかった。ライティングも良かった。
◎もっと生徒、保護者を呼べるように工夫したほうがよい。開催時期も考えては？アピール不足
◎時間どおりに始まってほしい。席の案内は座る前に誘導してください。
◎各校 PTA できることからコツコツと…といった感じがよかった。
◎緑が多く、きれいな会場でこのような施設があることを知れてよかった。
◎場外案内を 4 名で 2 時間固定は、7 月の暑い中過酷だった。30 分かせめて 1 時間交代で。
◎リハーサル室の時間割が必要。楽屋割も事前に。利用団体表示も必要。
◎3 年生が参加できるギリギリの時期。
◎講演が先は良かった。

新聞掲載

和太鼓、ダンスなど生徒披露

渋谷で都公立高ＰＴＡ連大会

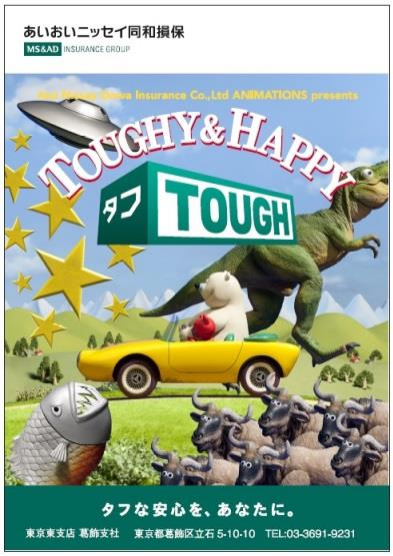
都内八十七校でつくる都公立高ＰＴＡ連合会の定期大会が十二日、渋谷区の国立オリンピック記念青少年総合センターであり、十校十三組の生徒たちが、日ごろの活動の成果を披露した。和太鼓やダンスなど幅広い分野の発表に、約六百人の保護者らが盛んに拍手を送った。

都立高で唯一服飾科がある農業高はファッションショーを行い、生徒はデザインからモデルまでこなして独創的な衣装で舞台を歩いた。切り絵や自作漫画などの展示のほか、バンクーバーパラリンピックのアイススレッジホッケーで銀メダルを獲得した安中幹雄さんが「生きぬく力」をテーマに講演した。

大会での生徒の発表は三年目。実行委員長の高田教子さん(五)は「自分の子どもの通う高校や、他校の活動を知る機会になれば」と話した。（大平樹）

演奏を披露する鷺宮高和太鼓部の生徒たち＝渋谷区で

協力　東京新聞



株式会社損害保険ジャパンと日本興亜損害保険株式会社は平成26年9月1日に合併をし、損害保険ジャパン日本興亜株式会社となりました。合併後も一層のお引立てを賜りますようお願い申し上げます。

損害保険ジャパン日本興亜株式会社 東京公務開発部営業開発課 TEL 03-3593-6506

第２６回　東京地区大会実行委員会　役割表

委 員 長	髙田　教子	向丘高等学校	ＰＴＡ会長
副委員長	田中　弓子	竹早高等学校	25 年度ＰＴＡ会長
委　　員	中根恵美子	板橋高等学校	25 年度ＰＴＡ会長
	朝倉りつ子	小平南高等学校	25 年度ＰＴＡ会長
	小磯　美雪	東村山高等学校	25 年度ＰＴＡ会長
	幸田　　豊	富士高等学校	元ＰＴＡ会長
	岡田　潤子	野津田高等学校	元ＰＴＡ会長
	志賀　充子	小川高等学校	元ＰＴＡ会長
	秋山あゆみ	松が谷高等学校	元ＰＴＡ会長
都高Ｐ連 副会長	志村なつみ	農業高等学校	元ＰＴＡ会長
都高Ｐ連 事務局長	青木真佐枝	大泉高等学校	元ＰＴＡ会長

協　力

資料作成	池本　義信	豊島高等学校	ＰＴＡ会長

平成２６年度スローガン

私たちの明日と、子どもたちの未来へ

東京都公立高等学校ＰＴＡ連合会

〒167-0052　東京都杉並区南荻窪４丁目２９番１０号　田丸ビル２０５号
TEL　０３－５９４１－５０６７　FAX　０３－５９４１－５０６８
URL　http://www.tokoupren.org　E-mail　info@tokoupren.org